

シャーマニズム観光と新しい交流

ーコロンビア南部の事例を中心にー

Emerging Networks Motivated by Shamanic Tourism: a Case from Southern Colombia

蝦名大助*
Daisuke EBINA

Abstract

Shamanic tourism in South America has been attracting a growing number of tourists from inside/outside the region. The situation has caused new networks between shamans and tourists to emerge, recently reinforced by social networking tools. Introduction of foreign concepts have been observed in ayahuasca ceremonies. Possible adoptions of new medicine among ethnic groups may cause a further and drastic change in their ceremony, which may put their traditional concepts/shamanism at risk.

キーワード：南米シャーマニズム, アヤワスカ, 真正性, ヒーリング

I はじめに

南米先住民の中には、アヤワスカに代表される幻覚剤や、コカなど精神に対して薬理効果をもつ伝統薬を用いる民族が数多く存在する。「アヤワスカツアー」などに見られるように、近年、この種の伝統薬を用いた儀礼の中には商業化したものが出てきている。また、儀礼は観光の対象となり、国内外から多くの観光者を集める事例もみられる。

本稿では、この種の観光現象を「シャーマニズム観光 (shamanic tourism)」と呼び、コロンビア南部における事例を中心に取り上げることとする。この新しい傾向により、治療者 (= シャーマン) と観光者とのあいだだけでなく、治療者同士のあいだで新しい交流が生まれつつある。本稿では、このような交流によって先住民のシャーマニズムに大きな影響が及ぶ可能性を指摘する。

本論に入る前に、ここで「シャーマニズム観光」ということばについて述べておきたい。山本 (2012) は、ペルー・アマゾンにおけるアヤワスカツアーの事例を取り上げ、それが伝統的な儀礼であることにとどまらず、観光化・商品化していることについて述べている。この種の観光において観光者の主要な関心がアヤワスカにあり、また観光を提供する側からみてもアヤワスカがもっとも重要な要素に位置付けられていることは間違いない。しかし、たしかにアヤワスカは南米先

* 関西国際大学 国際コミュニケーション学部

住民の代表的な伝統薬であるが、近年、観光者の関心は必ずしもアヤワスカにとどまらないように思われる。観光者の関心はより広い「伝統薬」とその儀礼に向けられており、これらを包含することばとして、本稿では「シャーマニズム観光」ということばを用いたい。なお、アヤワスカツアーの中には、ヨガなど、およそ南米先住民の伝統文化とは全く関係のない要素を組み込んだものもある。この点については本稿の最後で触れたい。

II 南米先住民の伝統薬

本論に入る前に、ここでは南米における伝統薬について概観する。南米先住民が用いる伝統薬は多岐にわたり、筆者はその全容を把握しているわけではない。ここでは特に精神に対する薬理効果をもち、伝統的な儀礼に関係するものを取り上げることにする。

1. 幻覚剤

南米先住民においてもっとも広く用いられる幻覚剤は、アヤワスカである。しかしアヤワスカは南米で唯一の幻覚剤ではない。アマゾン北西部、ブラジル・コロンビア・ベネズエラの国境に比較的近い地域に分布するいくつかの民族では、吸引するタイプの幻覚剤がみられる。ヤノマミ (Yanomami) がそうであるし (“The Yanomamö Indians of southern Venezuela and northern Brazil employ hallucinogenic snuffs made from a wide variety of feral and domestic plants.”¹⁾), またコロンビア南東部からペルー北部に分布するウイトト (Huitoto, Witoto) にもみられるようだ。これに対し、アヤワスカは飲用である。そのほか、サボテンの一種であるサンペドロ (San Pedro) がアンデスで知られているが、これも飲用である。

後述するように、アヤワスカの調理において主要な植物はバニステリオプシス・カーピ (Banisteriopsis caapi) だが、Chagnonらは “*Myristicaceae*. The most commonly used product is the bast bark (and resin from this bark) of a feral species of tree belonging to the *Virola* genus.”²⁾ と述べており、ヤノマミの幻覚剤においては異なる植物が用いられるようである。アヤワスカが低地先住民に広く普及しているのに対し、吸引タイプはそれほどではないように見受けられる。本稿の直接的な趣旨からは外れるが、これらの幻覚剤が民族間でどのように伝播したかは興味深いテーマである。

2. コカ

コカ (*Erythroxylum coca*) は主にケチュアやアイマラなどの高地先住民によって用いられる。植物としてのコカの分布域は温暖な地域であり、高地先住民の居住域で栽培されるわけではない。彼らは乾燥した葉をそのまま噛むが、しばしば少量の灰を同時に口に入れる。それにより有効成分が効果的に摂取できる。コカを噛むことにより、穏やかな覚醒作用が得られる。精製されたコカインに比べると薬理作用は非常に穏やかであり、上述の幻覚剤よりも穏やかである。

このように多くの場合、コカは葉のままでも用いられるが、上述のウイトトなど一部の民族では加熱・粉末状にしたコカ (マンベ mambe などと呼ばれる) が用いられる。

3. かぎタバコ

かぎタバコの摂取もみられる。コロンビアではラペ (rapé) と呼ばれている。管見の限り、高地先住民のあいだではかぎタバコはみられず、低地先住民にみられる。菌茎に塗るタイプもある。かぎタバコは、上述した吸引タイプの幻覚剤と混ぜて用いられることもあるようだ。

4. カンボ

カンボ (kambô) とはフタイロネコメガエル、あるいはその毒のことである。ブラジル低地先住民のうち、アクレ州に住むパノ系の民族が用いる。カンボが欧米においてよく知られるようになったのは、アヤワスカに比べると比較的最近である。カンボの使用については後述する。

アヤワスカとかぎタバコの分布域は重なっている。コカについてはそうではない。

以上挙げたうち、シャーマニズム観光においてはアヤワスカ、かぎタバコ、カンボの使用がみられるが、もっとも重要なものはアヤワスカである。以下でアヤワスカについて述べる。

Ⅲ アヤワスカとその分布

アヤワスカ (aya waska, aya huasca) とはケチュア語で「死者の蔓」を意味する。ケチュア語由来の名称を持つが、筆者はこれまで高地に住むケチュアのあいだでアヤワスカの使用を見たことがないし、使用したという話も聞いたことがない。ケチュア語を話す人々の中には低地に居住する集団も存在するが、多くは高地に分布し、またケチュア語の故地も高地と考えられている。

アヤワスカを主に用いるのは、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビア、ブラジルのアマゾン低地に住む先住民である。その中にはケチュア語の集団もいるであろうが、それ以外にも多くの民族が用いる。なお、アヤワスカの存在自体はアマゾン低地以外でも広く知られている。

アヤワスカということばはペルーやエクアドルで用いられる。同じものがコロンビアではヤヘ (yagé, yajé)、ブラジルではカーピ (caapi) と呼ばれる。民族固有の名称を持つこともあるようだ (Harner 1972, Harner 1973などを参照)。使用域とケチュアの民族分布とのずれを考えると、アヤワスカという名称が広く用いられるのは不思議であるが、これはケチュア語が異民族間で広く共通語として用いられたことを反映しているのかもしれない。たとえばエクアドル低地にはケチュア語を話す先住民もいるが、歴史的に考えるとこれらの人々はインカ期以降にケチュア語化したのではないかと考えられる。また20世紀以降に高地から低地に移住したケチュアの集団も存在すると考えられる。

南米の幻覚剤やシャーマニズムの記述において、アヤワスカはもっとも頻繁に言及されている。これに比して、先述した吸引タイプやサンペドロについての記述は管見の限り多くない。サンペドロについてはアンデス文明の中のモチェやチャビンで使用されていた記録が残っているとされるが、これらの文明が存在していた地域にはもはや先住民は残っていない。

アヤワスカは、バニステリオプシス・カーピ (Banisteriopsis caapi) に、別の植物を加え、鍋で何日間か煮詰めることによって作られる。加えられる植物の種類は民族によって異なる^{注1}。後述するカムサ族の場合には、治療者によってレシピが少し異なるということもあるという。

なおアヤワスカの薬理作用については、さまざまな医学的研究が行なわれている。

以上、Ⅱ節とⅢ節でみたことから、低地先住民と高地先住民とでは、伝統的な交流の程度がかなり異なることがわかる。ケチュア語には、ch'unchu ということばがあり、「野蛮人」を意味する。これは、ケチュア民族からみた低地先住民を指す。高地では栽培できないコカが高地先住民において広範に利用されており、文化的に重要な植物であることなどからみても、植民地期以前にも低地先住民と高地先住民とのあいだで交流があったであろう。一方で、アヤワスカの分布域や、低地先住民にしばしばみられる先住民語の多言語使用、通婚の習慣などからみて、低地先住民内でより広範で密な交流があったと考えられる。

Ⅳ カムサ族とアヤワスカ、アヤワスカ儀礼

本節では、コロンビア南部に居住するカムサ族におけるアヤワスカ使用とアヤワスカ儀礼について記述する。カムサ族の住むシブンドイは標高2,000mほどであり、いわばアンデス高地とアマゾン低地の中間にあたる。食べ物などは典型的な低地先住民とは特徴を異にしており、むしろ高地先住民に近いかもしれない。たとえば低地先住民の主食はキャッサバを粉状にして焼いたものだが、ここではキャッサバの利用はみられない。

これまで問題の伝統薬をアヤワスカと呼んできたが、この地域ではアヤワスカではなくヤヘ(yagé, yajé)と呼ばれる。カムサ語では biyajiy となる。ヤヘということばはコロンビア先住民の異なる民族で用いられるようなので、カムサ語にとってはおそらく借用語である。カムサの場合、バニステリオプシス・カーピに *Psychotria viridis* を加えたレシピが一般的であるようだが、詳細は不明である。

ヤヘを用いた儀礼は、通常夜遅く、9時ごろから始められ、長い場合には翌日の未明まで続く。被治療者には短い断食が課される。昼食は軽くとり、肉類やトウガラシは避けられる。夕食はとってはならないが、お茶類などを飲むことはできる。アヤワスカを飲んだ際の吐き気は強烈であるため、この苦痛を和らげる意味があると思われるが、山本(2012)などによると薬理作用の面からも合理的な理由があるようだ。

治療者は「タイタ(tayta)」と呼ばれる。タイタはケチュア語からの借用語で、本来は「父」を表わすことばだが、カムサ語では民族の長も表わす。カムサ社会のリーダーを表わす際にもタイタが用いられ、治療者を明示的に表わすことばはないようだ^{註2}。

治療は通常1人のタイタと数人の被治療者で行なわれるが、治療者をサポートするタイタを伴うこともある。タイタは鳥の羽の冠を身につけ、さまざまな道具を並べた後、ろうそくに明かりを点し、呪文を唱える。私が確認したところでは、この呪文はスペイン語のようであった。タイタはまず自身がヤヘを飲み、できばえを確認する。被治療者は握りこぶしよりやや小さいくらいのガラス製のオブジェで全身を撫でられたのち、ヤヘの杯を渡される。被治療者はヤヘを摂取し、しばし休息する。タイタは被治療者の状態を観察し、ヤヘの量が少なく効果が弱いと感じたときにはさらに一杯飲むように勧める。

短ければ30分ほど経つと強烈な吐き気に襲われる。ヤヘを吐き出したのちに幻覚作用がやってくることが多いようだが、常にそうではない。飲用に慣れている者には強い吐き気を催さないこともあるし、また幻覚そのものも必ず得られるものではない。

アヤワスカ儀礼では、何らかの楽器が用いられるのが一般的であるようだ。カムサの場合には

ワイラ (wayra, ケチュア語で「風」の意) と呼ばれる, 葉で作った団扇や, 笛, 太鼓などがみられる。ギターなど非伝統的な楽器が用いられることもある^{注3}。楽器が奏でるリズムは, 幻覚を促すものである。

幻覚から醒めしばらくすると, 下痢の症状に見舞われることが多い。これらの症状がおさまって, 朝になるのを待つ。すべてが終わると, 治療者は, 被治療者の胸, 両手首, 両足首, 頭頂から, 悪い気を吸い取ってくれる^{注4}。治療者は吸い取るたびごとにその悪い気を吐き出す。その後, アルコールと植物の入った液体を吐きかけ, 体に悪い気が入らないように封をしてくれる。

カムサ族にとって, アヤワスカ (ヤヘ) は単なる精神の不調を癒やすものではない。蔓は頭頂から足先まで, 体中を巡り, 全身の悪い気を追い出すものである。嘔吐作用も下痢の作用も, アヤワスカの重要な一部である。嘔吐や下痢は内臓における悪い気を追い出すものであるからだ。

管見の限り, カムサ族におけるアヤワスカの使用はもっぱら治療に用いられるようである。一方, 南米の他民族においては, シャーマンがアヤワスカなどの幻覚剤を用いて精霊を体におろし, 預言に用いるということもあるようだ。

カムサ族のアヤワスカ使用についてはいくつか注目すべきことがある。まず, アヤワスカの調理は, 彼らの居住地であるシブンドイでは行なわれない。カムサ族のシャーマン (タイタ) は, 低地アマゾンに移動して, そこでアヤワスカを調理する。また, シャーマンが身に着ける冠に用いられる鳥の羽も, シブンドイで入手できるものではない。コロンビアの低地先住民でしばしばみられるかぎタバコの使用もこの地域ではみられない。また, すでに述べたように, 気候条件からか, 低地先住民とは主食が異なる。低地先住民は一般的にキャッサバを主食としているが, この地域の主食はトウモロコシである。

なお, 一般的にカムサ族は熱心なカトリック信者である。アヤワスカ儀礼においても, カトリックとの習合の可能性が考えられるが, この点について詳細は不明である。

以上のことからみて, カムサ族と低地先住民とのあいだで, 交易があった (ある) ことが考えられる。そしてカムサ族におけるアヤワスカの使用については, 低地先住民から伝わった可能性がある。

V 南米伝統的治療の現状

ここでは, アヤワスカなどを用いた南米における治療の現状を概観する。

1. 被治療者——先住民と非先住民

カムサ族においては, 伝統的な価値観から, アヤワスカによる治療を求める人びとが現在でも存在する。インターネット上での広告, あるいは街中での広告などはみられず, 何も知らずにシブンドイを訪れた観光者にはここでアヤワスカ治療が行なわれていることはわからない。あくまで, カムサ・コミュニティの内部での治療が主であり, 外部からの参加者も受け入れる, といった印象である。先住民議会 (cabildo) 主催のアヤワスカ治療が行なわれることもあるという。

これに対し, 山本 (2012) などにみられるペルー・アマゾンでの事例は高度に商業化・観光化している印象を受ける。近年はインターネット上でもツアー参加者の募集が行なわれているが,

欧米人観光者をターゲットとしたものであろう。

このような主に欧米人の参加の背景には、古くはニューエイジやスピリチュアル・ブームの影響があるだろう^{注5}。また、近年アヤワスカに対して医学的な研究が行なわれ、薬理作用についての知識が欧米で広まっていることもあるかもしれない。ペルーの場合には、国が観光に力を入れているということもあるだろう。アヤワスカツアーが行なわれるイキトス (Iquitos) などの町は、もともとアマゾン観光の拠点となる場所であるという背景も考えられる。これに対し、シブンドイには目立った観光資源がない。また、1990年代から2000年代にかけてのテロリズムによって、観光者の流入が大きく減ってしまった、ということがあるかもしれない。

2. 治療者

治療者は本来先住民であるはずだが、ペルー・アマゾンでは非先住民（主に白人、いわゆる gringo）が担うケースがしばしばある (Freedman 2014などを参照)。ブラジルやエクアドルなどでもそうであろう。カムサ族の場合は管見の限りそのようなことはない。また、カムサ族であれば誰でもアヤワスカ治療を行なってよいわけではない。親族に治療者がいてアヤワスカやアヤワスカ儀礼の知識を受け継いでいるなど、何らかの条件が必要であるようだ。そのような意味でもさほど商業化は進んでいない。シブンドイは人口2万人ほどの町で、うち先住民人口は7千人程度、残りは非先住民である。先住民と非先住民との交流はあるが、ここでは非先住民がアヤワスカ治療を行なうことは許されないと思われる。管見の限り先住民から非先住民へ儀礼手法の伝授は行なわれていない。

また、ブラジルの場合には、非先住民が設立した新宗教の教団が、先住民のアヤワスカ治療を取り込んでいった (石川2016 a, 2016 b) 事例がみられる。当然ながら、これらの教団では治療者は非先住民である。石川はこれら新宗教の教団によるアヤワスカ治療を、伝統的な先住民によるものと区別してネオ・シャーマニズムと呼んでいる。先に述べたような非先住民の治療者 (シャーマン) の存在は、こういったネオ・シャーマニズムによる影響も受けている可能性が考えられる。

以上をまとめると次のようなことが考えられる。まず、先住民コミュニティ内部での治療は、もっぱら先住民の治療者によって行なわれる。ただし、コミュニティによっては非先住民が治療を受けることもできる。一方、はじめから観光者や都市の住民を対象とした治療も存在する。このような治療においては、先住民の治療者も、非先住民の治療者もみられる。

VI 新しい交流

1. 外部からの新しい影響

Freedman (2014) は、ペルー・アマゾンの町イキトス (Iquitos) で、21世紀にシャーマンのネットワークがどのように形成されたかについて述べている。山本 (2012) でも扱われているように、イキトスはアヤワスカツアーの中心的な町であると考えられる。また、そもそもアマゾン観光全般の起点となる町でもある。

Freedman (2014) によれば、アマゾン西部におけるシャーマン同士のネットワークは植民地時代やそれ以前から存在していたという。しかし、アヤワスカが世界的に人気を集めるに従い、近年いくつかの変化が起こっているという。1つはアヤワスカ調理 (brew) の共通化

(standardization), 2つ目は「儀礼」が行なわれる場所としての小屋 (maloca), 3つ目に「シャーマンの庭」であるという。シャーマンの庭というのは、観光者に見せるため、アヤワスカを栽培している場所のことである。そしてこの「庭」は、近年のエコツーリズムの影響を受けているという。外部からの観光需要に応えるために、シャーマン同士が情報を共有し、新しい手法を取り入れていった、ということが考えられる。

カムサ族の場合はどうであろうか。まずアヤワスカの調理はここでは行なわれないため、調理の共通化が起こっているかどうかはわからない。また、調理を行わないということは栽培も行なっておらず、したがって(植物としての)アヤワスカ (Banisteriopsis caapi) を見せるための庭も存在しない。ところが、儀礼が行なわれるための小屋 (maloca) はここでも観察できる。筆者は2019年に、まだ完成していない小屋を見ることができた。おそらく、このような小屋の形式は外部から伝わったものである。他民族や非先住民のシャーマンとの交流、あるいは外部からやってきた被治療者(非先住民)との交流によって、このような新しい文化が取り入れられているのではないかと考えられる。

また、カムサ族の場合には、シブンドイだけでなくボゴタやメデジンといった大都市で非先住民相手に治療を行なうこともある(他の先住民でも同様の行為があるかもしれない)。大都市での交流から影響を受け、それを居住地に持ち帰る、ということがあるかもしれない。

2. ソーシャルメディアの利用

ここではより新しい潮流として、SNSなどソーシャルメディアの利用による影響に言及したい。すでに述べたように、アヤワスカツアーにおいてはインターネット上で主に欧米人の観光者をターゲットとした募集が行なわれている。また、近年は、FacebookなどのSNSを用いての顧客の募集も行なわれている。

シブンドイでの治療は、ペルー・アマゾンの事例と比較すると、さほど観光化しているとはいえない。それはあくまで、先住民の中で治療者(タイタ)としての資格をもった者のみによって、第一義的には同じ先住民コミュニティのメンバーに対して行なわれる。非先住民や外国人などの外来者に対する治療は許されているが、商業目的で積極的に行なわれている様子は観察できない。しかし、少しずつではあるが、SNSの利用が増えているようにみうけられる。先述したような小屋の形式の受容にしても、ソーシャルメディアを通じた情報伝播の可能性も考えなければならない。

ところで、筆者は2020年にシブンドイに滞在した際に、ブラジル・アクレ州からやってきたカトゥキナ族(katukina)のシャーマンに出会うことができた。彼がシブンドイにやってきた経緯について詳しいことはわからなかったし、おそらく稀な事例であろう。カトゥキナ族はアヤワスカのほかにカンボやかぎタバコを用いる。カンボやかぎタバコは、カムサ族は本来用いないものである。先住民同士の交流や情報伝播は、以下に述べるようにその民族のシャーマニズムに重大な影響を与える可能性がある。

VII シャーマニズム^{注6}と真正性

V節とVI節でみてきたことから、ここで真正性 (authenticity) を問題とすることは不自然ではないだろう。すでに述べたように、先住民同士の交流や非先住民のとの交流によって、アヤワスカ儀礼を取り巻く環境は影響を受けている。ここで、民族固有のシャーマニズムが大きな影響を被る可能性について考えてみたい。

21世紀に入ってから欧米で知られるようになった南米の伝統薬として、カンボがある。カンボはフタイロネコメガエル (*Phyllomedusa bicolor*) の毒であり、ブラジル西部アマゾンのアクレ州などに住む先住民が用いる。上述のカトゥキナ族のシャーマンによると、カンボは本来、男性が狩りに出かける前に用いるものようだ。熱した棒の先端を皮膚に何か所か一瞬だけ触れさせ、軽く火傷した表皮を取り除いた後、毒を置いていく。カトゥキナ族のやり方では、男性の場合は肩に、女性の場合はふくらはぎなど内股に毒を置く。現在カンボは、観光者を対象として、体内の毒を吐き出す「デトックス薬」として用いられるようになっている^{注7}。

インターネット上のアヤワスカツアーには (<https://www.pulsetours.com/>³⁾), アヤワスカによる治療、カンボによる治療、かぎタバコによる治療 (おそらく幻覚剤が含まれたもの) を組み合わせたものがある。このサイトによると、アヤワスカ儀礼はシピボ (Shipibo) 族のシャーマンによって、カンボ儀礼とヌヌ (nunu, かぎタバコ) 儀礼はマツェス (Matsés) 族のシャーマンによって行なわれるという。ここでは、異なる民族による儀礼が同じ場で行なわれている。マツェス族はペルーとブラジルの国境付近に、シピボ族はペルー側に分布する。両者は言語的には同じパノ系に属するが、分布域はやや離れているように見受けられる。

この種のツアーにおける先住民同士の接触は、本来その民族が利用していなかった伝統薬の受容・利用を促す可能性がある。すでにそれは起こりつつあるのかもしれない。上述のシピボ族とマツェス族の場合、アヤワスカツアーが盛んになる以前から接触があったかどうかはわからない。しかしカムサ族にとって、カンボやかぎタバコは本来馴染みのないものである。先住民同士、あるいは非先住民を介した交流によって、こういった新参の伝統薬が徐々に民族間で知られるようになってきている。ソーシャルメディアの発達により、この種の情報の入手はますます容易になってきている。先住民は孤立などしておらず、遠く離れた他民族の文化・習慣に関する知識を持ちつつある。

Fotiou も真正性を問題にしている。

One aspect of shamanic tourism that is criticized is the introduction of foreign concepts to the vocabulary of the curanderos. (中略) Foreign concepts from Asian traditions are often adopted by the shamans to accommodate tourist expectations and needs.⁴⁾

実際、先述のアヤワスカツアーの中には、アヤワスカ体験に加え、「蒸気風呂」「ヨガ」など、およそ南米先住民とは全く関係のない「治療」を組み込んでいるものすら見られる。この種の「行き過ぎた」事例では、果たしてそれを「シャーマニズム観光 (shamanic tourism)」と呼んでいいのかという疑問も出てくる。シャーマニズム的な要素はツアーの一部に過ぎないとすれば、この種の観光は「スピリチュアル観光」「ヒーリング観光」などと呼ぶほうが適切かもしれない^{注8}。

ヨガなど南米外からやってきた概念からいったん離れ、南米先住民同士の相互の影響について再び考えてみよう。仮に観光化、商業化の帰結として他民族からの新たな伝統薬の導入が起こるならば、そのような治療儀礼は、ヨガなどがそうでないのと同様に、その民族のシャーマニズムに根差したものであるとはいえないであろう。Shepard (2014) は、ペルー・アマゾンのマヌー (Manú) における、先住民グループによる新しいアヤワスカの受容について述べているが、この受容は早くは20世紀半ばごろに起こっている。Shepard (2014) が記述するような比較的ゆっくりした受容と、商業化・観光化に動機づけられた近年の受容は性質が異なると考えられる。現在起こりつつある他民族からの伝統薬の受容がその地域のシャーマニズムにどのような影響を及ぼすのか、注視する必要がある。

VIII おわりに

本稿では、アヤワスカツアーに代表される、南米先住民の伝統薬を用いた儀式に参加するような観光現象を「シャーマニズム観光 (shamanic tourism)」と呼んだ。しかし、観光という文脈においては、本来のシャーマニズム的な要素は徐々に希薄になっていくのではないだろうか。南米先住民において、伝統的なシャーマニズム^{注9}とシャーマニズムを土台にした治療は、そのコミュニティ内部で今後も一定期間存続すると考えられる。しかし、外部の観光者を対象とした治療は、民族固有のシャーマニズム的な要素を徐々に失い、単なるヒーリングあるいはオルタナティブ・セラピー (alternative therapy) に変質していくのではないだろうか。ロケーションとしては南米であっても、その本質は同じ薬を用いて欧米で行なわれる治療とさほどかわらない。

外面的にはシャーマニズム的な形式をまとったこの種の観光を消費するとき、われわれが消費する (させられる) ものはいったいなんなのであるか。南米のシャーマニズム観光もまた、ある種のオリエンタリズム (あるいは逆オリエンタリズム) によって動機づけられているのかもしれない。

【注】

- 注1 Harner (1972: 3-4) にアヤワスカのレシピの記述がある。
- 注2 なおケチュア語では管見の限り tayta が治療者や長を表すことはない。治療者としては hanpiq (治療者) もしくは layqa (呪術師) などのことばが用いられる。
- 注3 なお南米先住民においては、伝統的な楽器といっても植民地期以降にもたらされたものが多い。
- 注4 山本 (2002) によると、エクアドルの先住民 (カネロス・キチュア) でも同様の行為がみられる。
- 注5 カスタネダ (2012) などがその表れである。ニューエイジ、スピリチュアルについては伊藤 (2003) などを参照のこと。
- 注6 南米のシャーマニズムについては、Harner (2009) [1980], 山本 (1997) を参照。
- 注7 <https://www.kk-bestsellers.com/articles/-/11165/> などを参照。なおカンボについてはその危険性も指摘されており、使用が禁止されている国もある。また商業化によるフタイロネコメガエルの乱獲も問題になっている。
- 注8 なおスピリチュアルな側面ではなく、伝統的な西洋医学による治療ではないということを表すことばとして、alternative therapy, complementary therapy などの用語もある。
- 注9 もちろん「伝統的なシャーマニズム」とは何かということは何れなければならない。先住民グループ同士の交流は古くからあったわけであるし、植民地時代以降、スペインを中心とする欧米文化の影響

がなかったなどと考えるはいけない。

【引用文献】

- 1) Chagnon, Napoleon A., Philip Le Quesne and James M. Cook “Yanomamö Hallucinogens: Anthropological, Botanical, and Chemical Findings” *Current Anthropology* 12-1, p.72, 1971
- 2) Chagnon, Napoleon A., Philip Le Quesne and James M. Cook “Yanomamö Hallucinogens: Anthropological, Botanical, and Chemical Findings” *Current Anthropology* 12-1, p.72, 1971
- 3) <https://www.pulsetours.com/> “Ayahuasca Retreat in Peru’s Top Ranked Healing Center by AyaAdvisors”
- 4) Fotiou, Evgenia “On the Uneasiness of Tourism: Considerations on Shamanic Tourism in Western Amazonia” in Labate and Cavnar (eds.), p.168, 2014

【参考文献】

- ・石川勇一「アマゾン・ネオ・シャーマニズムの心理過程の現象学的・仏教的研究」*トランスパーソナル心理学／精神医学*15-1, pp.62-86, 2016 a
- ・石川勇一『修行の心理学——修験道, アマゾン・ネオ・シャーマニズム, そしてダンマへ』コスモスライブラリー, 2016b
- ・伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』溪水社, 2003
- ・カルロス・カスタネダ『ドン・ファンの教え』太田出版, 2012
- ・山本誠「よみがえるシャーマニズム」論座1997年5月号, pp.154-159, 1997
- ・山本誠「幻覚剤と治療——カネロス・キチュア（エクアドル）の治療儀礼を手がかりに」武井秀夫・中牧弘允（編）『サイケデリックスと文化——臨床とフィールドから』春秋社, pp.173-201, 2002
- ・山本 誠「ペルーアマゾン, アヤワスカツアーをめぐる——観光化, 商品化されるシャーマニズム——」*四天王寺大学紀要*第54号, pp.291-312, 2012
- ・Chagnon, Napoleon A., Philip Le Quesne and James M. Cook “Yanomamö Hallucinogens: Anthropological, Botanical, and Chemical Findings” *Current Anthropology* 12-1, pp.72-74, 1971
- ・Fotiou, Evgenia “On the Uneasiness of Tourism: Considerations on Shamanic Tourism in Western Amazonia” in Labate and Cavnar (eds.), pp.159-181, 2014
- ・Freedman, Françoise Barbira “Shamans’ Networks in Western Amazonia” in Labate and Cavnar (eds.), pp.130-158, 2014
- ・Harner, Michael *The Jivaro*, University of California Press. (originally Doubleday/Natural History Press), 1972
- ・Harner, Michael (ed.) *Hallucinogens and Shamanism*, New York: Oxford University Press, 1973
- ・Harner, Michael *Way of the Shaman*, Harper Collins Publishers, 2009 [1980]
- ・Labate, Beatriz Caiuby and Clancy Cavnar (eds.) *Ayahuasca Shamanism in the Amazon and Beyond*, Oxford University Press, 2014
- ・Shepard, Glenn H. Jr. “Will the Real Shaman Stand Up? The Recent Adoption of Ayahuasca Among Indigenous Groups of the Peruvian Amazon” in Labate and Cavnar (eds.), pp.16-39, 2014.
- ・<https://www.kk-best-sellers.com/articles/-/11165/>「今, 話題の【カンボ】で壮絶体験! -カエルの毒で感情を浄化するデトックスとは? -」